



「旅立ちの地」エッセイコンテスト

## 入賞

### 旅立ちの朝

大塚 遥香 東京都

て息を潜めて物音を聞き逃すまいとしていた（私の部屋は玄関が一番近いので、玄関先での会話がよく聞こえるのだ）。

「〇〇は持った？ ●●はバッグに入れた？」

せわしなくバタバタしているのは母だ。

「大丈夫や、寮は車で一時間やし。何か必要なものがあつたらいつでも電話するんやで。届けに行くでな」

あ、これは父だ。

弟はというと、うん、うん、とやけに大人しい。いつもはあんなにうるさいのに。昨日だって肉の奪い合いでぎゃあぎゃあ揉めたはず。まだ寝ぼけているのか？

三人は次第に言葉少なになっていった。私はそつと、一センチほどドアを開けた。そこには何か言いたいのに言葉が出ない、といったようなもどかしい空気が流れていた。

「じゃあ、行ってくるでな。」

ようやく言葉を発したのは弟だった。やや震えているが、しつかりとした声。私からは当然顔は見えない。けれど、どんな顔をしているかなんとなく想像できた。何年も姉をやっている、顔を見ずとも、きょうだいの表情くらいは察しがつくのである。

元気でね、電話してね、と母が言い、からだに気をつけるんやぞ、と父が言った。

玄関のドアが開く音がした。ああだめだ、行ってしまふ。

見送りに行かなくては……。意を決して出ていこうとした瞬間、弟が少し大きめな声で言った。まるで私が起きているのを知って、聞こえるように。

「ねえちゃん、行ってくるでな。」

そうして、弟は家を出て行った。ドアが閉まってから玄関に居るであろう両親は動こうとせず、やがて母のすすり泣く声が聞こえた。大丈夫や、きつと。父がそう語り掛けるのも聞こえた。最後までドアを開けて見送りに出ていくことができなかった情けなくも愚かな姉はというと、ドアの前で立ち尽くしていた。ぽた、ぽた、と水滴が床に落ちていく。ばかだなあ・と思った。泣くくらいなら、ちゃんと見送りすればいいのに。ぼんやりする頭でそんなことを考えていた。

そうして弟は旅立った。夏休みや冬休みに帰省すると、寮生活は楽しいとか大変だとか話していた。見るたびに口調も雰囲気も変わったように感じた。どうやら私よりも少しだけ早く大人になっているらしい。そう気づいたのは少し経ってからだった。

私は本当は言いたかったのだ。行くなって。あなたがおらん家はつまらんくなるぞって。ガンバレ、よりも変な意地が勝ってしまった、だから私は弟が旅立つ日の朝、姉として彼を見送ることができなかった。

今ならよく分かる。私は弟が旅立つのが、この上なく寂しかったのだ。

今でも思い出す旅立ちの朝がある。

二十年以上前の、まだ寒さの残る日の朝。私は自室にて、ベッドの中で耳を澄ませ、葛藤していた。起きろ、起き上がるんだ、そして玄関に出ていく、なに、いつもやっていることじゃなか・何度かそう言い聞かせているのになぜか体が動かないのだ。からだを起こして自室から出ていくのは時間にしてほんの数秒のはずだが、見えない力が働いているのか、まるで体が動かない。

その日は、四月から高校に入学する弟が、入寮のために家を出る日だった。スポーツ推薦で合格したため、寮に入り、仲間たちと切磋琢磨しながら三年間の高校生活を送っていくのだ。弟とは違う高校に入りバス通学をしていた私からすると、彼は一足先に親元を離れることになる。そういえば前日の夕食は焼肉だった。饞別を兼ねていたに違いない。

のそのそベッドから出た私は、ドアに耳をつけ